■創立当時の桂倶楽部

大正4(1915)年創部
全国2番目の歴史と伝統

桂倶楽部100年

本市に本拠地を置く硬式野球チーム「桂倶楽部」は、本年100周年を迎えます。

桂倶楽部の創始者「奥源禄(おくげんろく)」の「野球で培われた健全な精神こそ郷土発展につながる最善の道」を部訓として、地域に根差した活動を続けてきました。

今回は、桂倶楽部の草創期をご紹介し、山梨県野球のさきがけとして大正・昭和・平成と続いてきた〝桂倶楽部100年のあゆみ〟をひもときます。

【桂倶楽部 草創期】

大正4(1915)年第一次世界大戦のヨーロッパにおける戦況は、ますます拡大の一途をたどり、日本は、大戦景気の恩恵に浴している…そんな時代でした。

七月の暑い日、東京から一人の青年が帰郷しました。彼は奥源禄という、谷村の地に野球を持ち帰った男です。早稲田実業在学中より野球を始め、今で言う〝いわゆる野球狂〟となりました。早実から早稲田大学を出て帰郷したものの野球への情熱はつのるばかりでした。奥は、谷村町から都留中(現都留高)へ通う学生達からメンバーを集め、狭い谷村小の校庭で練習を重ね対戦相手を探していました。

この年、第1回全国中等学校野球大会が開催され、今日の高校野球へと繋がる長い歴史の第一歩を刻み、野球は、着実に人々の心をとらえていきました。

しかし、その頃の山梨県野球事情は、甲府中(現甲府一高)が長野県の諏訪中と定期戦を行う程度で極めて低調なものでした。

そんな中、奥のチームは、山梨師範学校(現山梨大)野球部と一戦交えることになりました。

8月29日正午、場所は、山梨師範学校校庭　遠征に際し「尽きぬ桂川の清流」にちなみ「桂」と命名し、ここに日本に現存する社会人硬式野球チームでは、北海道の函館太洋(オーシャン)倶楽部に次ぐ全国二番目の伝統を誇る「桂倶楽部」が誕生し、この記念すべき初の対外試合は、5対2で快勝し文字通り初戦を飾りました。

大正11(1922)年大リーグ選抜チームが来日、また東京六大学リーグ戦も隆盛となり、全国的に野球熱が高まっていましたが山梨県の野球界、特に郡内は不振でした。

そこで桂倶楽部では郡内球界の活性化のために「野球技宣伝部」を設け、西桂・三吉・谷村などの小学校の休憩時間にシートノックを披露し、野球の普及に努めました。さらに谷村町少年野球大会を主催するなど野球少年の育成に力を入れ、底辺拡大を図りました。

その結果として、大正15～昭和4(1926～1929)年に谷村小学校が山梨県代表・南関東代表として全国少年野球大会出場し、また、同時期に谷村小学校に全国でも珍しい女子野球チームが結成されるなど谷村の野球熱は、確実に高まっていきました。

やがて野球少年の大半は、都留中野球部(大正11年創部)谷村工商野球部(大正14年創部)などを経て桂倶楽部の主力となりチームを最強とするとともに谷村を県内一野球の盛んな町にしました。

桂倶楽部は、町内・商店・工場対抗野球大会等様々な大会を主催しました。その中でも昭和4(1929)年に八朔祭行事として主催した「町別野球大会」は、営々と受け継がれ、本年83回を数えるまでになっています。

昭和2(1927)年に開催された社会人野球の最高峰「都市対抗野球大会」を模して、〝町対抗野球〟として始まった「都留市町別野球大会」は、全国でも類のない最も歴史のある大会といわれています。桂倶楽部は、大正末期から昭和初期にかけて黄金時代を迎えました。

都市対抗野球山梨大会には常に参加、県下を制し、甲神静大会(山梨・神奈川・静岡)または、山静大会(山梨・静岡)にもしばしば出場しました。特に昭和14～16(1939年～1941)年には、三年連続優勝を飾り、県下に敵なしの黄金時代を謳歌しました。

■昭和16年　都市対抗野球県大会三連覇